

座談会

藝能史研究會

十年のあゆみ

藝能史研究會委員会

出席者 赤井 達郎
植木 行宣
川島 将生
北川 芳彦
権藤 忠一
中村 保雄
林屋辰三郎
守屋 毅

司会 本日はお忙しいところをお集りいただきまして、ありがとうございます。藝能史研究會の十年間を回顧する座談会を始めたいと思います。前もってお願いしたように、それぞれの時期の活動状況の御報告をいただき、それぞれの自由にお話しいただきます。では創立以前のあたりを、まず権藤さんの方からお願います。

京都の伝統芸術の会

— 藝能史研究會の前身として

権藤 藝能史研究會が、十年目に自らの歩みをふり返ってみようという。そのことが、やはり藝能史研究會というひとつのグループの姿勢の現われであると思うのです。といいますが、前身とも言える伝統芸術の会ははずで、二十五年たっていますが、そのような試みは全然ありません。そこに、伝統芸術の会と藝能史研究會の性格のちがいがいると思います。

伝統芸術の会は、東京の方で昭和二十四年に設立されています。どういふふうにして伝統芸術の会が生まれたのか、私はあまりその辺は詳しくないのですが、「藝能史研究」第二号に、藤浪隆之氏が寄せられた、「サークルニュース」によると、「去る四月から伝統芸術の会が、二年ぶりに復活した。この会は、社会心理学者の南博氏を会長に、能・狂言・歌舞伎・新劇の俳優、舞踊家、研究者や評論家が集って、伝統芸術の各ジャンルに共通する諸問題（古典芸能など……）を自由に語りあうことを目的として、昭和二十四年に結成された。」云々とあり、これでは意を尽していると思います。昭和二十四年という年は、大変な年でありまして、その次に年に朝鮮戦争が始まります。ペッター、アメリカ一辺倒であったのが、いわゆる民族文化の遺産の継承という気持ちが非常に高揚して来た時期でありまして、伝統論なども高まってきた

います。ちょうどその年に林屋先生の「かぶきの成立」が刊行されており、片方は、「きけわだつみの声」が出版され、また前進隊が共産党へ集団で入党した、そういう年であります。一方、下山事件、三鷹事件、松川事件なども同じ年におこっているわけで、そういう意味では、昭和二十四年というのは、戦後史の上でターニングポイントになっていたといえます。

東京の伝統芸術の会というのは、大体が実際に実技をやっている人が中心になっていて、各ジャンルで共通している問題とか、技術の交流とかは、かなり積極的に行なわれていました。ジャーナリストチックであるともいえませんが、伝統芸術そのものの研究よりは、実際のな面の方が、それをどのように継承、発展させてゆくかという課題が重きをなしていたのです。

そこで、いつごろ関西の伝統芸術の会が生まれたのかということ、私の方ではよくわかりませんので、察するところ、松島栄一先生あたりが、東京の方で中心になっておられたので、林屋先生の方に要請があつて、関西支部といった意味でおつくりになったのではないかとあつたんです。その辺のことは、後ほどお話が思うと思いますが。

昨日、その頃の日記をすつと見ておりましたら、私が初めて伝芸に顔を出したのが、昭和二十八年です。二十八年の六月に新門前の片山博通先生のお宅で、井上千代さんに「菊」と

「倭文」を舞ってもらって、猪熊兼繁先生の解説でした。それから六月十九日に、楽友会館で同じく伝芸の会があり、これは「尾上九郎右衛門を囲む会」というので、菅泰男さんが司会をやっておられたんです。二十九日は、板東鏡助と片山九郎右衛門の対談を行なっています。それから、七月十五日に、林屋先生の「祇園祭りについて」というお話をうかがい、九月三十日には同じく林屋先生の「狂言について」というお話があり、ついで、茂山千之丞が「名取川」を演じています。

以上のように会場はほとんどが、新門前の片山邸で、司会は菅さんと林屋先生が交替で行なっておられたようです。その年の十二月には桑原武夫氏を呼んで、井上流の家元の家である片山邸で、「家元制の批判」の講演をやったことがあります。（笑）

それから、二十九年の二月にも、八千代さんの舞を舞ってもらっています。五月十七日に武智さんが「日本演劇における狂言の位置」について話された。これは、例の松本新八郎さんや林屋先生の論文が出て、狂言を再検討するといふ風潮のあつた時期なんです。

そのころまでは、私は会員として参加してはいたのですが、五月二十五日に、伝芸の会の委員会にはじめて出ました。百万遍の進々堂でありました。それは、河出書房から伝芸講座が出るので、その編集を手伝ふというので、茶道論の編集会議に出たのですが、私がお茶を知っているはずがないのに、その頃は、武智鉄二先生

37	12	22	38	2	10	22	44	2	45	3	11	46	春	47	4	12	48	6	5
第一回準備会（袖戸屋）																			
発起人会・創立総会（京都念仏）																			
会誌第一号創刊																			
例会活動開始（壬生狂言見学会）																			
▲毎日学術奨励金受賞▲																			
▲会費値上げ																			
田中一光デザイン表紙																			
特集・桃山時代の舞台芸能（特集号の初め）																			
出版活動を計画 一中断																			
郵便法改正																			
学術刊行物指定																			
出版計画開始（日本の古典芸能）																			
御勝八幡見字（最大規模の見字会）																			
特集・明治維新の芸能（以後しばらく特集中断）																			
事務局京都親世会館へ移転																			
「日本の古典芸能」配本開始																			
例会会場はほろ菜友会館に定着																			
事務職員設置																			
特集・煎茶（発行後一ヶ月内に完切）																			
会計状況悪化、特別財源より25万円借入																			
レコード「音でつづる国民の歴史」																			
テレビ番組「四国芸能」監修																			
「日本庶民文化史料集成」企画本格化																			
「日本の古典芸能」完結																			
会費値上げ																			
例会第二金曜日に定まる																			
創立十周年記念大会（日伊会館）																			
「日本庶民文化史料集成」配本開始																			

のところにて、演劇雑誌の編集などしていたので「あれはよく来るし便利だから入れとけ」ということだったらしいんです。（笑）

ということは、逆に言う、伝芸のちゃんとした母胎があったはずで、この時期のことは、村井さんに来てもならないとよくわかりました。

とにかく、東京の伝芸と関西の伝芸とは差がありました。東京の方が実技的であるのに対して、関西の場合は、土地柄といいますが、実技者あまり参加しなくて、むしろ、鑑賞者中心の、悪くいえば趣味的な集まりでした。ただし林屋説の、文化の創造を支える三つの担い手説（①実際に制作に当るもの、②経済的負担をなすもの、③作品を享受するもの）によりますと、実際に制作する者がずつと京都の伝芸を支えてきた、といふふうになると思います。

それからいまだ園劇場にいる山田庄一君、毎日新聞に入りまして京都支部へまわって来たので、彼をひき入れて、毎日新聞京都支部とタイアップして、伝芸講座というのを寺町御幸町の毎日ホールでやりましたね。

林屋 これは沢山来ましたね。

権藤 はい。それから私は三十年になりますと、東京へ行きましたので、それ以後の関西のことはよく知らないんです。

そういうふうなことで、関西の動きというのは鑑賞的な立場にあって、具体的な問題をつかまえる時に、やはり武智鉄二氏の演劇活

とい動うものがキーポイントになっていて、それをどう評価するかということがあったように思うんです。それが武智さんが運動を止めて東京へ行ってしまっ。それから関西歌舞伎も衰退するということ、ちょっと動きが消極的になってきたよです。

東京の方も昭和二十四・五年から三十五年くらいまでの間は、文化運動の高まりがありましたけれども、それからあまり活潑な動きのないまま、休会の状態であって、そのときに、関西の方で藝能史研究会の発会の動きが生れてきたのではないかと、というふうに思います。

伝芸活動がいちばん高まったのは昭和三十年のころで、七月の十六・十七日に、大阪のサンケイ会館で、富十郎（先代）が「矢車座」とい



伝芸、東西交流の頃

して動いてもらうようになるのが、彼が大学院に入るころでしょう。

赤井 私も京都へ来たすぐのころで、片山さんの家へ行って、学生服を着た村井さんが受け付けに座っていました。そこで面の展覧会がありました。

林屋 そうするとその前があるのかな。そのころは中村先生は。

中村 僕は昭和三十一年から藝能史研究会の始まる前で、三十二年・三十四年と三年間、金剛さんのところで、能面講座というものをやっています。

それから、これに続いて前西さんが稀曲の復活をやったんです。「甚」だとか「落葉」だとか。そしてそのあとに藝能史研究会が続いてくると思います。ちょうど伝芸と藝能史研究会の間が、前西さんの活躍でした。

林屋 それは言うなれば、伝統芸術の会の延長線上にあってまだ藝能史研究会の発前史ですね。

中村 そのとき能面の会も藝能史研究会に入ってくれるかとおっしゃったことがあるんです。林屋先生の頭の中には、そういったものをずっと描いていらして、いくつか組み合わせようというお考えがあったようです。

片山先生の家で村井さんが受け付けをしていらつしやるのを一・二度お見かけしましたが、いつも林屋先生は奥様といらっしゃいましたよ。

権藤 それは有名でしたな。(笑) 松島先生と林

うものを主宰しまして、武智さんが「法成寺物語」を演出したんです。そのときに、東京から大挙参りまして、関西の伝芸と交流したことがあります。これには十五日に東京から、浜村米蔵・西山松之助・松島一・広末保それから事務局長として、藤波兵衛・隆之兄弟・今尾哲也君などが来られた。こちら側からは、林屋先生はじめ、中井宗太郎先生がおられました。十五日の晩に集って、十六日の屋にサンケイの「矢車座」を見まして、夕方京都に帰り、いもほうへ行きまして、宵山を見物いたしました。十七日には、四条通の田中弥の二階から祇園祭を見ました。それからチンチン電車にのって、北野から等持院・龍安寺を案内してまわりました。その晩に片山邸で伝芸の東西委員会を開きました。翌日、鳥原の角屋と二条陣屋を見学いたしました。というように、四日間大合同をしました。というように、四日間大合同をしたことがあります。これがやっぱり伝統芸術の会のいちばん山場ではなかったかと思えます。

それで十六日の晩が、いもほうで、明る日祇園祭がすんだときに、湯どうふに行こうと言つたら、「昨日がいても、今日はどうふか、わしはとでもしんぼうでん。肉を食わせい」というので、急遽予定を変更したことをおぼえております。(笑)

司会 今のお話ですと、伝芸が昭和二十八年ないし、それをさほどさかのほらない時期にはじまって、だいたい三十二年ごろまでが活動期であり、三十年ごろに東西交流があつて大変高

屋先生のところには、招待券は二枚送らないから。いつもアベックで来るのだから。(笑)

ということになっていました。

林屋 そんな話を承りましたか。(笑) 伝芸の活躍期には、村井君とともに事務局では山田祐造君がやっておられたですね。

北川 藝能史研究会というのを作ろうと思うのが……と私がお話を承ったのが、三十七年の十一月、稀曲の会の帰りにたと思えます。だからやっぱり、伝芸と稀曲の会と藝能史というのはつづいているんですね。稀曲の会というのは三十五年・六・七年に「秦山府君」「落葉」「甚」を毎年一曲ずつ復活上演されて、非常に盛りあがりました。

榎木 私が参加したのは、「甚」が最初でした。

新しい共通の場

— 藝能史研究会の創立

司会 ちょうど話が藝能史研究会発足当時のところまでまいりましたので、その時期の事情を、赤井先生の方から、お話し願いますよ。

赤井 これまでお話のあったように、藝能史研究会は伝統芸術の会をひとつの母体として生れたものではあります。が、伝統芸術の会、これに京都の「伝芸」は古典芸能を鑑賞する会、悪くいえば伝統芸術趣味の会といったような性格をもつていたように思います。藝能史研究会はこうした伝芸のあり方への反省をもつて生れるわけですが、新しい藝能史研究の場をもとめる気運はかなりはやくからあつていたように思います。

まったというこなんですが、伝芸の始まる時期のことについては、ここでは林屋先生しか論証する方がおられないのですが、先生、どういう経過ですか。

林屋 これは私と南博君とが小学校——慶応義塾の幼稚舎ですが、そこで同級生でいつも仲間でしたから、南君との間には早い時期から交渉があったわけですね。彼はつづり方に「林屋さん」というのを書いたくらいです。から。(笑) 人物月旦の素質は小学校のときから。(笑) ところが、一見すると社会心理学の南君とは全然世界がちがうようだけれども、京都で彼が自分の仕事を広げたり、協力を求めようとすれば、私たちを念頭におかれることは、そんなに唐突なことではありません。また、松島君とは歴史の方での関係があります。

権藤さんのお話を聞いてみると、何かこう、前世のことのような気になってしまいます。(笑) いろんなことがありましたなあ、ほんとに。

藝能史研究会が生れてくるのが三十八年という、今のお話はちょうど、そのもう十年前になるわけですね。今のデータは伝統芸術の会で行なわれていたかということで、資料としても大変面白いですね。参考になります。伝統芸術の会というのは、今おっしゃった通りだけれど、非常に楽しい会です。

前に何か母胎があつたというふうにおっしゃつたけれど、私は二十八年の六月が伝芸の第一回ではないかと思えます。村井さんに事務局と林屋先生の「日本演劇の騷擾」や「雲雀の成立」は当時の若い研究者たちの間に大きな刺激をあたえ、会誌の第一号にもあるような「伝芸の歴史的研究を趣味的な欲求にもとづくものから解放して、より総合的に、より科学的に前進させよう」とする動きが分散にはありますが、各所にあらわれており、京都の伝統芸術の会もふるわなくなった昭和二十七年の秋ごろから、京都を中心に各ジャンルや各学校に分散している芸能史の研究者を結集する会を作ろうという話が、林屋先生を中心にするわけ、三十七年の暮もおしめされた十二月二十一日上京区の榎戸屋で第一回の準備会がもたれるようになったわけです。

第一回の準備会では研究会の目的や性格、さらにいつ発会するかなどが話しあわれ、会則原案の作製・会誌発行の具体案などが討論され、翌三十八年一月の第二回準備会では会の趣意書や会則案も決定され、発起人の依頼などもはじめられ、具体的に動きはじめました。創立総会は二月十日、京都会館でもたれ、百十五人の発起人の紹介が行なわれ（それがそのそのまま評議員になるのです）、会則の決定や、事務局を自分の間立命館大学文学部日本史研究室におくことなどが決定され、盛会の中に第一歩をふみだしたわけですね。

中村 ちょうど開かれた例会は、その年の四月、田中緑紅さんと中村保雄さんを講師として壬生狂言の見学会からはじめられ、会誌は三十九年四月（第一号を出しています。第一号は

伝芸から藝能史研究会まで

前 西 芳 雄

雑誌金剛の復刊十周年記念として稀曲観賞能会
 探り上げられ、昭和三十五年の十一月に金剛能楽
 堂で、その第一回の「泰山府君を観る会」が催さ
 れた。従前より観賞能はさして珍らしくもなかつ
 たが、稀曲一番の上演形態などがひかえられて予
 想外の盛況であった。翌二十六年の十一月には
 「落葉」、そして二十七年の十一月に「基」とは
 三ヶ年続けてこの観賞能は催されたのである。

「泰山府君」「落葉」は稀曲ながら流儀の現行
 曲であるが、「基」は現行曲でなく、わずかに明
 治二十年の十一月に金剛月並能で、シテ金剛識之
 助、ツレ高岡鶴三郎で上演された記録があるのみ
 で、復活を前提とした試演であったのである。

この「基」の上演が、年々盛り上ってきた関心
 を結集したかの様に盛会で、一般見所は勿論、研
 究家評論家と目される人々八〇余名の観能、終演
 後のレセプションにも四十九名参加という盛況で
 ここに一つの交流の場が出来たととも言えるのであ
 った。

これより先、京都に「伝芸芸能の会」があつ
 た。終りの頃には井上流歌舞の観賞能がよくあつ
 た。いつ頃まで活動していたのか、この時分には
 あまり催しもなかった様に覚えている。この名簿
 をもらい、之を一つのより所として昭和三十四
 年より中村保雄氏の能面研究講座が持たれた。こ
 の講座が前記の観賞能を含めてその後の一連の催
 しの先鞭であったのである。引続き三十七年には
 豊橋や長浜の能面見学、三十八年には補殿寺見学

「日本芸能史」といふべきものは、歴史学のなか
 でも、他の学問体系のなかでも、必ずしも正当
 な位置が与えられているとはいいがたい」、そ
 こでわれわれは「ひろく全国の芸能史研究者を
 結集し、——芸能が一定の歴史的条件のもとに
 おいて、相互に深いかかわりをもちながら成立
 して来たものであることを、正確な歴史認識の
 上に立って考えたい」という、たいへん格調の
 高い「創刊のこぼし」にはじまり、論文・芸能
 史フット・資料紹介などとともに、「芸能シヤ
 ーナル」という名前で各ジャンルの現状や問題
 点を大きくとりあげました。この新しいところ
 みは、いわゆる芸能史家だけでなく、梅原猛・
 北山茂夫・關芸の八木一夫氏など芸能史研究と
 は直接関係をもたない方々にも登場していただ
 き、初期藝能史研究会の大きな成果だったと評
 価できると思います。

創立当初で思い出されるのは「芸能史の総合
 的研究」というテーマで昭和三十八年度の「毎
 日学術奨励金」を受賞したことがあげられま
 す。三十九年正月多くの会員が参加した三河の
 花祭の調査なども、その総合研究のひとつとし
 て行なわれたもので、八号の特集「桃山時代の
 芸能」もそのひとつの成果として発表された
 ものです。この奨励金がそうした研究活動にと
 って大きな意味をもっただけでなく、金賞だけ
 でまかなわれていた苦しい会費財源にもつても、
 たいへん大きな貢献をしたことも、また事実で
 す。三号雑誌といわれますが、二年目に入ると
 はやくも財政的危機がおとずれ、このころ事務

に金鳥書を読む会、四十年には能郷の見学や佐渡
 の見学会などが催された。そして三十八年にはこ
 の「藝能史研究会」が発足したのである。

先に述べた観賞能は三回で終わったが、この様な
 形態に近い、後援会能はその後各所で数多く誕生
 している。

「総合」と「比較」と

上 田 正 昭

一九六三年の二月十日、京都会館で発起人会、
 創立総会が行なわれてから早くも十年の歳月がす
 ぎた。柴田先生と創立総会の議長をつとめさせて
 いただいたその昔、ついでこの間のことのように
 想起する。

藝能史研究会
 は芸能史の研究
 に学問的な思考
 きをそそぎ、孤
 立分散的になり
 がちな個別の研
 究に総合的な視
 点を提供するこ
 とをめざして努
 力を積み重ねま
 したと思うのだが
 そのころをま
 具体化して「日
 本の古典芸能」
 十巻の刊行とな
 った。

私は木田先生

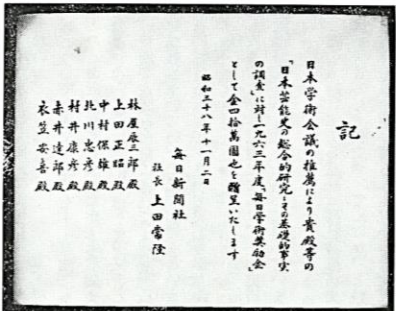
京都の歴史 全10巻 京都編

【編集委員】 今泉篤男・貝塚茂樹・桑原武夫・柴田 実興
 高山義三・塚本善隆・奈良本辰也・林辰辰三郎・平沢

判割上製函入・平均650頁・各3500円
 日本の歴史に巨大な足跡を残してきた古都—
 京都千年の歴史に挑み、第一線学者がぼう大
 な資料を駆使して共同執筆する、画期的全集

- 1 平安の新京 原始・平安
- 2 中世の明暗 平安末・南北朝
- 3 近世の胎動 室町・戦国
- 4 桃山の開化 安土・桃山
- 5 近世の展開 寛永・元禄
- 6 伝統の定着 享保・天保
- 7 維新の激動 幕末・明治維新
- 8 古都の近代 (明治・大正)
- 9 世界の京都 (昭和)
- 10 総索引・年表

東京都中央区 学藝書林 電話03(552)5906
 八丁堀2-3-5 振替東京 10821



五号から田中一光さんに、本当に奉仕的によつ
 ていただきました。それ以後現在まで、嵯峨本
 から取ったデザインがつづいているわけです。
 この表紙については、いろんなことがいわれ
 ています。「京の着流れ」ともいわれておりま
 すが、(笑)いろいろな雑誌の表紙の中でも、抜
 群の表紙だと、われわれは誇つていいのではな
 いかと思えます。(一同大笑)

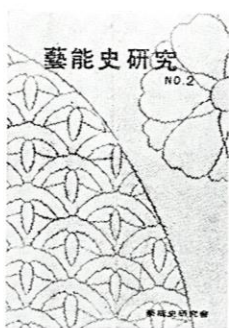
司会 どうもありがとうございます。会の発足
 当時のことについては、皆さんおわかりとは思
 いますが、林屋先生、その頃の状況、お心づ
 もりなどを、もう少しお聞きかせ願えないでし
 ょうか。

林屋 そうですね、やはり、京都での日本の歴史
 学界の状況が、日本史研究会などというものを
 持っているけれど、研究の発表がどうしても
 社会経済史的なものに片寄り勝ちで、文化史的
 な研究は軽視されていて、私はなんとかその点
 で、文化史的な、芸能史的な——私は大学卒業
 以来、芸能史などへの関心が深かつたし、そ
 ういう方面の研究論文を出してはいいが、どう
 もそういう空気がないので、どうしても、研究
 機関が必要ではないかと思ったのです。それか
 ら、動機先である立命館大学に、大学院が出来
 たとき、一番先に入ってきた人が芸能史専攻の
 人だったのです。米元栄一君という、歌舞
 伎の控舞の研究を論文として修士課程を修了し
 た人ですが、そのうちに、学生の中にも、だん
 だん芸能史を勉強しようとする人が増えてくる
 し、そういう人たちのための発表機関なり研究

機関が、もう一つ立たないことには、当時の日本史研究会だけでは、どうも包み込めないような印象を持ちまして、藝能史研究会を作ろうと思ったわけです。実際に、研究意欲を持った学生さんが、ずいぶん増えて来たという事実があったわけです。藝能史研究会の最初の時期の委員の中には、植木直君を先頭に、高橋清志君とか、渋谷祥晃君とか、宮垣克己君とか、そういう人たちは皆、芸能史を勉強しているのだが、それをつけて行く舞台がないのであるのではないかと考えても、思い立ったのです。だからどうしても研究会をつくる必要があるのではないかと、私も含めて、思い立ったのです。若い人たちにやろうという意欲があれば、研究会はびますねえ。伝統芸術の会とか、種曲の会などだけでは、研究活動が維持できないのです。若い人たちがどんどん勉強していくという空気があると、こういう研究会も大いに将来性があるだろうという見込みが、大體出来たのです。

植木 なるほど、そうして、発足当時、いちばん忙しめをなさったのが、その頃の若き日の植木さんなどの世代であったわけですね。植木 そうですね、ちょうど私がこの研究会と直接の関わりを持つようになるのが、さきほどお話しした、第一回の準備会の頃で、当時、実際の陰の舞台裏というか、そういう役をしていらした衣笠安喜さんをパイプにして、いろいろ話をうかがいまして、あまり力にもならなかったのですが、あとへノコノコとついていった次

からお取りになったということですね。植木 そうですね、表面には悩ましてね。植木 そうですね、この大きいですね、普通の雑誌ですと、まあ日本史研究なんてもっと小さいのに、この大きさを選ばれたのは。赤井 これは第一回の準備会で決ったのです。権藤 写真などを載せるために。赤井 そうですね。



創刊の頃の表紙

林屋 まあ、雑誌が最初にはへん立派に出来たので、これはきつとスポンサーが居るのだから、という憶測もあったようですが、私たちとしては、一貫してそういうシステムは採用しなかったのです。『藝能史研究』は、そういう意味では、本当に、みんなで作った雑誌ですね。近頃、やや論文の内容が専門化してきたようですが、その当時から、加藤秀俊さんの「放送と芸能の伝統」とか、三隅治雄さんの「南島のかけあい」とか、岡本健一君のすぐれた卒論とか、

第です。まあ、いつの間にか粉れ込んだような形で、北川先生や中村先生の方へ行ってやってきました。当時は、私は神戸の方へ行ってやりまして、実際の仕事のお手伝いが大してできず、御迷惑をかけておりました。この時、やはり大切なお働きがあったのが衣笠さんで、衣笠安喜さんがまとめ役として居て下さったのが、ずいぶんありがたかったです。植木 そうですね、初代事務局長とかがったかな。植木 そうですね。そして、それを庶務の面から支えて下さったのが、黒川直則さん。中村 そうそう。植木 私なんかは、ある面で、非常に楽をさせていただいたわけです。(笑)

北川 やはり、モヤモヤとして中心のなかった関西の藝能史研究者を、一つの会に集めようとなさったのが、先生の意図だったのですが、まあ、どうしても国文の方でも——歴史でもそうだというお話がありました。歴史でもそうだとお話しすることになると、まあ、のけ者というか、特別な人間みたいにして(笑)、私などもいつもボヤいていたのですが、そういう立場の者に理解を示して下さい、ありがたかったです。植木 衣笠君なども思想史であり、文化史研究の学生の特来ということを熱心に言っていましたね。植木 あの当時は、ある意味では社会経済史全盛時代で、なんだ文化史やっつてんのか、というよ

うな、鼻もひっかけてもらえなかった状況があった。これは魅力のある雑誌になるという印象を持ってですね。司会 四十年の一月に桃山時代の芸能の特集ができていますが、これは特集号の第一回でもあり、共同研究のはじめともいうべきもので、この辺りのこともうかがいたい。赤井 これはどうしても特集号を作らなければならぬ事情があって、それは先に言った、毎日の学術奨励金に対して、研究報告という形をあらわす必要があったからなのです。同時にそれが特集号のはじめになったわけです。北川 だから「花祭り」の見学記もそこへ入れたわけです。赤井 でも五号を出す頃は本当に財政が苦しかったのです。まあ、一号から六号頃までは、広告が比較的多くとれて助かったことがありました。植木 そうですね、毎日の学術奨励金をもらったことがずいぶん助けになっていますよ。その名の通り、学術奨励に役立った典型的な例ですよ。(笑)

林屋 その金額は四十万円、今でなら八十万円にも当る価値であったわけですね。植木 そういろいろんな形で、創立当時には多くの方に御尽力いただいたわけです。赤井 当時の発起人のメンバーなどを見ていると、実にバラエティーに富んでいて、その方々がかかり積極的の動いて下さってありがたかったですね。創立時の会員数は四〇程でしたが、これも、発起人の方々の御尽力が大きか

りましたね。あはは、まあ、……。司会 お遊び。(笑)

植木 そうそう。ましてや芸能なんぞ。(笑) 全くそうなんです、その頃、ただ一人赤井先生が、絵画という分野で日本史研究会の中で、重要な活動をなさっていたのですが、にもかかわらず(笑)、文化史なんでものに対するあつかいはひどかったです。しかし、実際には、数も少なく徐々にあったけれど、そういう方面に関心を示す、若い学生たちも参加してきて、サークルなんか、あちこちでできてきた。一つ一つの核を持ったわけですね。植木 今の話にもあったように、日本史研究会が存在している所で、藝能史研究会ができるということについては、日本史研究会の委員諸氏が、どのように考えられたか、いろいろ批判もあつたように聞いていますが……。

赤井 かなり批判は強かったですね。植木 分派行動と、はっきり非難した人もありました。それで、あまりに日本史研究会のことを気にしたために、あの創立総会席上で、(藝能史研究会のことを日本史研究会を言ってしまう)大失言をしたわけですよ。(大笑) いまだに皆さんに記憶されていて困っているのですが、それだけ日本史研究会はたいせつに思っていたのです。(大笑) 植木 話は少し変わりますが、会誌の第一号の表紙はどなたのお智恵だったのでしょうか。赤井 これは、林屋先生が、あの頃出た染織の木

つたですね。司会 私に藝能史研究会を御紹介いただいたのは角田一郎先生でした。君、こういう会があるのだから、是非入らなくては、などとおっしゃって、入会の用紙やいろいろ下さったことを記憶しております。角田先生との知り合いは、兵庫の農村歌舞伎舞台を調査していた頃で、先生のお話をうかがって入会したようなわけです。先生が当時の私のような学生までお誘いになるように、周囲の方々も皆、この藝能史研究会をもりたてていくような空気があったのでしょね。

植木 そうですね、実際の、当時の立命館大学には、本当にお世話になりましたね、当時の同僚諸君が、研究室——しかも私立の一大学の中で——に事務局をおくことに、きわめて寛容で、あたたかくももっていてくれたことは、本当にありがたいことでした。今から思えば、あの頃の立命館は、非常にいい時期だったのです。植木 そうですね、忘れてはならないのが、当時、事務局で実務的な仕事をおひきうけ下さった方々のごことですね。黒川、高橋さんや、宮本さん……。植木 そうそう、本当にあの方たちには、御世話になりましたね。(権藤氏退席) 藝能史研究会の歴史 司会 事務局がもっとシンドクなのは、観世会館に移る前後だからだと思いますので、それは

後に触れるとして、次に北川先生の方から活動期の御報告をお願いします。

北川 38・39年の活動は赤井先生の御報告にもありましたが39年には会誌に「桃山時代の芸能」(8号)を特集し、「三河の「花祭り」の見学会」を行ないました。それで、特集号が良いものだということがわかり、その後、隔号で特集を組もうということになりまして、40年度には「世阿弥」(10号)、「柳田・折口民俗学と芸能史」(12号)の特集号を出しました。「世阿弥」では、福田秀一氏の「世阿弥と良基」で良基書簡が発表されましたが、これは戦後の世阿弥研究の非常に大きな収穫だったと言えます。「柳田・折口」では、民俗学をいかに芸能史の方で生かすかという方法的なものを扱ったことが特色でした。

伊東 桃山の特集、世阿弥の特集は、よく雑誌が売れました。

北川 この間に行なわれていた例会で注目できるのは、特集号に対する批評的なものを何度か行なったことです。例えば、40年6月には「桃山時代の芸能」特集に対して脇田修氏に、また41年9月には横山正氏に「元禄時代の芸能」特集(14号)の批評をしていただきました。一方、42年1月には、「文化文政期の芸能」特集(18号)に先立って、その序論となるべき報告を、松浦路氏にお願いしたこともありました。このように、会誌と例会活動の総合化、共同研究化等を計ったことは、この期の例会の特色でもあり、また芸能史研究会の特色であったとも言えます。

ました。そして、44年4月付の25号では、44年6月の大会記事と43年12月の例会記事が合せて載せられるという異常な状態になりました。内容でも、論文よりも資料紹介、あるいは論文といってもノートの的なものが多くになってきたことをみまします。いかにこの頃首が忙がしくなってきたかがわかります。「文学・語学」(51号)の学界展望で金井清光氏が「京の着倒れ」と評されたこの年です。(笑)その意味で、遅れに遅れた24号の編集後記で「古典芸能の発刊を会の再出発としたい」という誤ごましの決意がなされています。実は、昨夜、そのところを読みまして感慨無量でした。依然として、この間紛争が続くのですが、それは同時に会誌の遅刊を意味します。44年2月頃には事務局を立命館大学日本史研究室から京都親世会館に移します。この年は例会も非常にさみしくなり、5月の林屋先生・鶴谷真智子さんの御報告のあと、4カ月程度空白ができてしまいます。このことも「鴨川住吉」の見学会があったくらいで、ようやく12月になって懇親会の席上で赤井先生に「絵金について」お話しいただいた頃から、例会活動がふたたび軌道に乗りはじめるわけです。

司会 いまになったら、一回も休みなくというくらい(笑)、実はそうではないわけやね。

北川 従って特集号も組まず、会誌を発行するのがやっとだった年であったわけです。ついでに申しますと、25号で内山美樹子さん、26号で籠谷・小笠原恭子・安田富貴子さんと、女性特集

ます。

40年度の活動について補足しますと、会誌では、「芸能ジャーナル」欄がジャンル別をやめて総合されます。また「日本の古典芸能」の発刊が企画されますが、中断の止むなきに至ります。

さて、41年度には「家元制度」特集(16号)が出ました。これは、14号で元禄期の芸能に取り組みましたので、次に文化文政期の芸能を取り上げようという話だったのですが、企画を練っており、うちに、化政期に至るその前段階としての明和期というものも考えねばならないということになりました。その頃の家元制度の固定ということが問題になり、特集となりました。そういった意味で、無理に特集号をつくるのではなく、自然と出来た感じがします。

なお、この41年度だけでしたが、会誌に芸能史関係の「論著目録」を作成して掲載しました。また、7月には郵便法の改正がありました。学術刊行物から一旦改め、膨大な郵送料に泣かされるんですが、小島吉雄先生の御尽力により、翌年2月にはようやく指定されます。

林屋 その原因の一つは「表紙がいかん」ということだったのです。(笑)表紙が派手すぎるということと、また芸能ジャーナル等によって、趣味雑誌的な印象をもたれたという風に聞いています。

北川 会計面では、もうこの頃から大分苦しくなりました。図書館への新規加入の呼びかけを盛んに行っています。

また、この頃から大分苦しくなりました。(笑)

林屋 あれはええね。(笑)北川 ただ一つの朗報は、11月に「日本の古典芸能」の発刊がはじまりました。まさに、これが再出発のスタートとなったわけです。

45年度からは、だいたい旧に復したと言えるでしょう。31号の「煎茶」特集がすぐに売切れてしまったことと、事務職員にきていただきはじめてから、32号の執筆者が20歳代の人達ばかりであったとか、いろいろ話題がありました。次第に芸能史研究も新しい世代に移りつつあると言えるかと思えます。「古典芸能」は第2巻から第6巻まで順調に出たのですが、第6巻「舞踊」では部落問題について不注意な点があり、我々も即座に反省の声明を出したことでいられなかった。当研究会の気持ちを理解していただけたと思っています。なお、この年の「文学・語学」(59号)の学界展望では、小笠原さんが、会活動を「古典芸能」とともに評価さ

また、大会の反省で、応募原稿が減り依頼原稿が増えているという意見が出ています。これは特集号を出していたことも関係すると思います。

さて、次に20号では幕末特集を企画していたのですが、「農村と芸能」に変わりました。この頃から「近代と芸能」という特集をねらっていたのですが、実現はずっと先(37号)になってしまいます。「日本の古典芸能」の出版が改めて企画されたもの頃です。42年10月には、「御膳八幡宮紫宸殿出陣」見学会が催されますが、これは動員数において最大規模の見学会となりました。

司会 御膳八幡の見学会では、中ノ堂一信君がパンパツで、人を集めてくれました。彼は後にいいレポートを書いてます。

北川 というようなわけで43年を迎えるのですが、43・44年は大変な年で、ちよと学園紛争と重なるわけなんです。さて、43年の始めには日本歴史学協会の委員選出学会に指定され、上田正昭先生が代表で参加されることになりました。また、22号で「明治維新期の芸能」の特集、これは、「近代」特集への足がかりといえます。そして、この年から「芸能ジャーナル」が消えます。そして、例会では「日本の古典芸能」シリーズが始まります。また、この頃22・23号あたりから会誌発行の期日が守られなくなり、44年1月付発行の24号には、44年5月例会の記事が載るというように、「発行日」と「例会ニュース」の記事に、はっきりとズレが出て来

れています。

46年度になりますと、特集がないにもかかわらず、会誌の紙数が増えて厚くなったのが目立ちます。これは会の研究活動が盛んになったあらわれでしょうが、33号などは88頁という一頃の倍近くとなり、「京の着ぶくれ」となります(笑)。それ故に、会計状況もますます苦しくなりました。34号には一頁をさいて会計危機の訴えが出ました。その他の活動としては、テレビ映画「四国の芸能」の監修、「音でつづる国民の歴史」の編集、あるいは「日本の古典芸能」の完結、「日本庶民文化史料集成」の企画の本格化などが挙げられます。この年の「文学・語学」(62号)の学界展望では、徳江元正氏が会活動の充実と若手の進出を認められております。「指導よろしきを得ているのであろう」と書かれています。

47年度では、ひきしほりに特集が組まれ、「近代と芸能」(37号)・「花と芸能」(40号)が出されました。展望の「近代と芸能」が出たわけなんですけど、内容からみるとむしろ「近代と演劇」であり、芸能史研究がめざしている総合的視野に欠けている嫌いがあったのではと反省されます。例会の方では「日本庶民文化史料集成」シリーズが盛り込まれているのと、京大友会館で毎月第二金曜日というのが固定化したことが話題です。

こうしてみますと、43・44年度の学園紛争を会がどのように対処してきたか、それ以前と以後とで会そのものがどのように変ってきた



「日本の古典芸能」カタログ

かが、一つの話題となるかと思ひます。司会 どうも有難うございました。それぞれの時期に、それぞれの方々の体験もあり、感慨もあるかと思ひますが、御自由に御発言下さい。

なお、少し補足しますと、41年9月に横山先生が「元禄時代の芸能」の特集をめぐって問題点を指摘されると共に、かなり御自分の意見を述べられましたので、これが「農村と芸能」特集のきっかけとなったわけですが、この「浄瑠璃芝居の変貌」という巻頭論文は、実はこの時の御報告でした。

北川 ああそうでした。お話が非常に面白かったので、書いていただこうということになったのでした。

司会 もう一つ補足しますと、事務局が観世会館に移転した頃のことですが、植木さんに御相談して、事務局のもので立命にあったのを、波戸さんの下宿へ一たん移してしまおうわけです。

植木 つまり、重要なロッカー保管になっているもの——帳簿類を、このままにしておいてはダメだということ急遽移したんです。司会 あの頃一月くらいは、波戸さんの下宿へ移ったことがありました。川嶋 当時会計を担当していたんですが、会計に混乱があったので五万円程行方不明になり、あわてましたが、あとからその分の振替が出てきて、安心したりしたこともありました。

植木 その頃は、波戸さんが前面に立って苦労し

直すために尽力して下さっています。植木 この頃から新しい後継者、つまり学生さんが事務局に入らなくなりましたね。紛争の影響ですか、伊東さんあたりが最後の世代ですね。

伊東 45年2月頃に例会の係をやれと言われまして、それ位なら学部生でもできるだろうと思っていたんですが、3月になりますと急に会計をやられることになりました、いつのまにかずるずると事務局に引き込まれた感じがした。広報 46年の2月頃、私も藝能史研究会の仕事をお手伝いするようになったのですが、大体その前後から現在の事務局のメンバーが揃ってくるのではないのでしょうか。堀口康生さんがやはり同じ頃、あとから熊倉功夫さん、翌年に佐藤憲司さん、今年に加藤さんが加わっています。

熊倉 芸能ジャーナルが中止になったあたりは。林屋 創設のねらいとしては、ともかく、すぐ読めるところ、軽い論文の外に雑誌の魅力ということを、意図していたのですが……。北川 ジャンル別に分けて、東と西が交替で書くことになったんです。

熊倉 いま読み返すと、大変面白いものですね。北川 林屋先生は、最初からジャーナルの企画にずいぶん乗気だっただけで、一番先に音を書いたのは、茶・花の分野だったと思ひます。演劇関係はともかくとして……。熊倉 あれがもう少しまともに発展すれば、茶・花の方の批評論というか、そういうものにもなり得たでしょうね。

北川 総合版になってからも、無理に茶・花の話

おられました。会費を払っているのに未納になっているという苦情が集中的に出た時期です。それから、京都市史編さん所が果す役割みたいなのが、この頃かあったのではないですか。立命館の研究室を出してって拠点があったんですから、事務局が観世会館に落ちつくまでは、市史が暫定的な事務局のかたちになっていたのではないですか。

林屋 編さん所の森谷勉久さんが積極的に会活動に協力してくれたり、川嶋さん・中ノ堂さんなどが事務局で活躍してくれたりね。

赤井 校正の受渡しなどは、ほとんど市史でやっていますね。

司会 それで、観世会館に移転してからも、ずいぶん権藤さんにかかれたことがありました。荷



藝能史研究会事務局

を話題に盛りこんで書いたという程度の号が多かったです。

司会 ジャーナルが止められた最も大きな原因は、執筆者の負担が大変で、執筆者が枯渇してしまったことです。総合版にしても、年4回誰か一人でもとて書くとか、リレー方式ということで、その時考えていることをアトラダムに並べるとか、座談会方式などいろいろ考えんてますが、座談会方式などは事務局がまっ先に音声を上げて……。

堀口 41年・42年の忘年会では、共にその年の「芸能回顧」をしていますね。これは「ジャーナル」に使うためのですね。

林屋 そのころもう「ジャーナル」を載せつづけることが苦しくなってきました。はじめは、「ジャーナル」によって東西協力を意図していたのですが……。堀口 熊倉氏の発言の裏には、「ジャーナル」復活の意図があるのではないですか。

熊倉 単なる読み易さだけではなく、「ジャーナル」というのは、現場と研究者をつなぐ際の重要な役割を果たす大変面白いものだと思います。というのは、藝能史研究がある意味で趣味的だといわれる一方、今年の大会の印象としても語られたことですが、単なるアカデミッシュな集まる学会ではなくて、市井の人々に気軽に参加できる、開かれた学会だという特色があるでしょう。そういう会の性格が「ジャーナル」という現場の話題と研究をつなぐ記事のなかに生きてくると思っております。

物は移したんですが、事務局員が常駐できなかったのもので、観世会館に電話がかかってきても誰も居らず、ご迷惑をかけた。そのうち、今度は市史に電話がかかってくるようになりまして、時には「藝能史研究会ですか」なんて……。

北川 隔も貸していないのに母屋を取られた。(笑)

植木 それで、やはり常駐する人が必要だというので、事務局員が設置されることになりました。45年の秋頃です。

司会 事務職員設置の財政的基盤としては、「日本古典芸能」の印税がある程度たまりだしたこと。最初の事務局員が立川洋さん、その後は高橋里子さん、そして現在が加藤貞子さんになりました。事務局の体制ということになりますと、はじめが衣笠さんと黒川さんが中心、そのあと植木さんと波戸さんです。波戸さんが御病気になるまで、現在の体制になっているわけ。この間、伊東久さんが事務局に入られて、名前だけの事務局員はやめていたかどうかという、大爾正がありました。事務局員の設置も伊東提案でした。

林屋 それはやはり藝能史研究会におけるヤング・パワーの成立——紛争みたいなものですよ。(笑)

北川 その結果、大変合理化されましたね。伊東 合理化ということで補足しますと、帳簿類を前西さんの御指導で改めたのがこの頃で、そのあと権藤さんが会計担当となって財政を建て

林屋 そのとおりですね。「ジャーナル」のなかにはそういう要素、つまり例会で持っている姿勢を雑誌で出そうとすれば、「ジャーナル」のような形になるでしょう。——なかなか書き手がむづかしいんですね。これは芸能評論家として非常に広い視野をもつ人が出てきて下さい……。思いきって一人の人が一年間お願い致しますとしておいた方が良かったんじゃないでしょうか。

北川 会規模が発足当初から六百から七百というところですよとききますね。いつだったかな、七百を突破したという喜んでたのは。伊東 会員数を関西とその他の地方で比較してみますと、およそ五対三くらいの比率になります。まだまだ全国的な広がりをもっているとはいいいい難しいですが、新入会の方の住所をみますと、次第に全国的規模の学会に発展しつつある傾向がみられます。

林屋 日本史研究会にしても、第一号は五千、二号七千という景気のこと、一千以下がつづき、印刷が四百、配布が二百まで落ち込んだこともありました。現在は二千ほど印刷しているようですが……。その点で、一千部をコンスタントに刷れるのは結構なことですね。日本史研究会の例もあるように、いずれそのうちに会員数の一大飛躍があると考えられます。

植木 会規模は変わりませんが、会費の高額滞納などの名前だけの会員というのは減って、実質的な会員が多くなったようにです。司会 最近、図書館関係の加入が増えてきまし

た。一方、発足当初に義理で入った方が減じています。
北川 その意味でも、意義のある会員ばかりであるといえますね。

林屋 「日本の古典芸能」というのは、五周年を記念して行ったものですが、総合的に歴史と芸能の流れをまとめてみたいという意欲があったわけです。その点で、平凡社の社長、また編集の吉清真次さんなどが、当方の意欲を理解してくれて、非常に熱心に行ってくれました。その結果、会の財政的基盤となったのは勿論ですが、この企画によって、藝能史研究会が京都という一地方の学会ではなく、日本の意味をもつようになったといえます。

研究の充実と拡張―現状と展望

司会 現状から展望へという事で、中村先生にお願いいたします。

中村 その話に入る前に、少し話させていただきます。まず、僕のような素人を藝能史研究会が育て上げてくれたのは、感謝しなければならぬと思います。芸能史に入るきっかけがなかったら、能面研究だけの狭いものに終わっていたにちがいないのに、これだけ私の研究の幅を広げられたのも、藝能史研究会の特徴だろうと思います。

現状についてまとめてみますと、会の発足以来早くから学会にその価値を認められており、その実績が現在もおおまかには続いている事を再確認したいと思えます。また会員の中に若いしかり

録をきちんと残して次の世代に伝えなければならぬでしょう。
もう一つは若年層の研究者育成ですが、芸能史の研究は年がかかるといふ事を前提にして、会として考えていかねばならないと思えます。会そのものは、今のところうまくいっていますが、あと五年、十年と続いてほしい。ある意味では、今までが続いたのが奇跡的だったのかも知れない。(笑)それはともかくとしてですね、関西以外の土地からも、若い研究者が、最近会に吸いよせられてきているのは心強い事です。

司会 この辺で若手の方からも少し意見を出してもらいたいですか。堀口さんあたりどうですか。

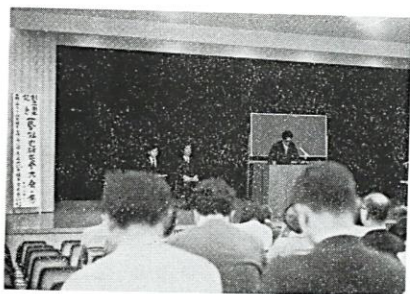
堀口 えー、そうですね。会の研究活動は例会と会誌が中心ですが、今までは何か幸運にも会誌に研究成果をひろいあげてきた、という感がありますね。事務局で土曜懇談会といった研究会を作ってみたら、事務処理に追われて途切れていく。こうしたものをもっと発展させていきたい。

熊倉 最近、若手と中堅委員の断絶が、いささかあるように思います。誌面をみるとメンバーが固定化し、もう一つ新しい層の執筆者の開拓をしないと。その点40号の特集「花と芸能」では、ヨーロッパ・中国との比較芸能といった問題が出てよかったですね。会誌の世評も定まったのだから、他の分野の人もとり込んで、線を太くしたい。

した研究者が他の学会より多く在籍しているため、将来は明るいものがあります。その反面、会の運営には困難な点が多く、会員数の増加の方法と、会計状況の正常化に真剣に努力し、いかなばならない時期にきております。これに関連して、会の運営にあたる委員会が討論不足で、いつも事務局にまかせきりな大きな問題です。

次に将来にわたる展望を試みてみますと、まず芸能史の将来に向けて確立すべき研究方法として、十周年記念大会における林屋代表の記念講演の次の三つの点を再確認したいと思います。それは(1)研究の総合と(2)比較研究と(3)共同研究の三つであります。

この事を促進するために私は文献的研究と現



創立十周年記念大会

植木 最近埋蔵文化財の破壊はるる大きく言うようになつたのですが、民俗芸能に関しては無関心ですね。不安を抱かざるをえない。理論的に民俗芸能を将来どういう方法で保存していくのか、という事を全体として、そろそろ考えなければならぬ時期にきているのではないのでしょうか。

川嶋 その点ですけど、たとえば左京区の久多を例にあげますと、芸能が現実どうかわかりあっているのか、今年は花笠をやるのかやらないのかが現地では大きな問題になっている。単に古いからというだけで残すというのでは、現地の人は納得しない。そういう状況だと思いますね。

植木 民俗芸能の場合に、祭りのなかから芸能だけを引っぱり出してだけでいいか、どうよかに、問題があるでしょう。将来学際学というよなものが必要になり、人類学分野の人も出てきてもらわなければならぬ。音譜のほうからの研究もまだ充分ではない。総合雑誌としての「藝能史研究」も、その辺を考えていかなければならない。

赤井 そうはいっても、他学会との共同は大へんむつかしいじゃないかな。個々の会員レベルでの関係はあっても、たぶん見通しは暗い。むしろ他分野の人に原稿を依頼して、できるだけ広い周辺分野の人を入れる事を考えてみるべきだと思いますね。

伊東 会誌の内容をみてみると芸能史の中でも演劇史、とりわけ能・歌舞伎の占める部分が多

場との調和を提唱したいと思えます。その一つは教育で言う住民主義で、方法論は原始的なものでよいから、誰でも使えるものを利用しながら、やがて科学性を高めていく方法によって、次代の芸能史研究者をこの中から育てていく必要があると思います。

第二には現地主義で、芸能史研究には現地ではないと判らない事が多く、まず足でかせく事をすすめたいと思えます。第三には結合主義で、すすんで他の専門分野に参加する方向で研究討議をする事を、提唱したいと思えます。ただしこれは単なる分担主義ではなく、相互交流と総合化の方向が必要であります。このためにも関連学術団体と積極的に機関と機関同士の相互のかわり合いをもつ必要性があります。

次に藝能史研究会の活動としては、会誌「藝能史研究」での発表だけでなく、現在進められている図書刊行を積極的に進めていく必要があります。三一書房の「日本庶民文化資料集成」をすすめるとともに、企画の段階で止まっている「図録日本芸能史」もその実現のために努力したいと思えます。財政面では、来たる二十周年をめざして、基金をしっかりとつ事が必要で、「藝能史研究基金」の設立を二十周年記念を目ざしてすすめて、できればその中より奨励金なども出せるようにしたところかと思えます。

北川 当会の義務としては、資料を保存をすすめていく必要がありますね。これは大へん難しい事ですが、芸能は変化していくものだから、記

く、周辺分野は少ない。他の分野の人々をひっぱりこむだけでなく、我々のほうからも、どんな他へ出ていくの必要だと思えます。
林屋 中村さんも言われた事やけど、音に関するものもやらなければならぬ。「音でつづる国民の歴史」はその意味で評価できるのじゃないですか。あれをテストケースとして、将来はもっと大きなレコードを、芸能史で企画できるのではないかと。史料に視覚・聴覚という柱を考えると、二十周年ぐらいに計画したらどうでしょう。

赤井 実は某大出版者より、古典芸能のレコード企画がまいこんでいます。
全員 そりゃええ。(笑)

事務局出席者

- 伊東 久之
- 熊倉 功夫
- 川嶋 将生
- 堀口 康生